

「熱」と「愛」

なみき やすとし
並木 泰宗

●連合・企画局長

「熱」と「愛」といっても残念ながら浮いた話ではない。先日、ある勉強会でスーパーコンピュータ「京」の開発を指揮された理化学研究所の渡辺貞名誉研究員のお話をうかがった。例の「二番じゃ駄目なんですか？」発言で有名になった大事業である。2011年の完成時には圧倒的に世界で「一番」、今では4番目に後退したものの上位3つはいずれも軍用なので、民間向けとしては今でも世界で「一番」とのこと。そんな素晴らしい大事業を成功させた渡辺さん曰く、「リーダーとして肝要なことは、夢をもてる明確な目標設定と、個々人の得意とするところを伸ばしてあげること」。加えて「京」について語る渡辺さんから溢れる「熱」と「愛」も、事業の成功に不可欠な要素であったのだろうと感じた。余談だが、蓮舫さんは「京」の開発に理解があり、本当は「一番じゃなきゃ駄目なんです」と言わせたかったための例の発言だったと聞いたことがある。・・・真偽のほどは定かではありませんが。

さて、「熱」と「愛」である。わが国の首相は憲法改正に「熱」をあげているようだ。その「熱」は強力で、首相の周囲から漏れ伝うかぎりでは、命を賭してでも成し遂げようとする覚悟すら感じられるということだ。そして首相には「愛」もある。「戦後レジーム」の中では窮屈な一族を解放する自愛に満ちているようだ。その文脈で語られる憲法改正は、国民を巻き込んだ一族の仇討ちの様にも映る。首相が「熱」をあげて取り戻したい「愛」すべき日本とはな

んぞや。いずれにしても強烈な「熱」と「愛」が、首相の周囲や国民の一部にも伝導していることは間違いないようだ。

一方の野党である。民主党と維新の党が合流し、「民進党」が結党された。道は険しいと思うが、政権交代を果たす政党として発展することに期待したい。その為にも、渡辺さん曰くの「夢をもてる明確な目標設定と、個々人の得意とするところを伸ばす」ことが大事だ。そして、必要不可欠なのが「熱」と「愛」だ。立憲主義を前面に立て結集の大義を形成し、民意の受け皿となって勢力拡大を目指すことは、当面の選挙戦術としては理解できる。一方で、国民が夢をもてる明確な「日本の進路」を示し、新たな政党として互いの得意とするところを尊重しながら、命を賭すほどの覚悟が感じられる「熱」をもって、国民や将来世代への「愛」を何よりも大事にする政党となることが肝要だ。自愛の「熱」を凌駕する他愛の「熱」の固い結集であれば、国民はその「熱」の方に導かれるのではないだろうか。

翻って、労働組合である。連合統一大会で掲げられた「連合の進路」の綱領や基本目標は、今でも強い「熱」を帯び、連帯するものへの「愛」が感じられる。しかし、それから四半世紀以上が過ぎ、世界も日本も連帯どころか分断に向かっている。今日の労働運動には、分断された人々への「愛」を源泉にして、連帯を取り戻すことに「熱」を入れることが必要だ。